教職実践演習におけるグループ研究の実践報告

A practical report on a group research of the class “advanced seminars for prospective teachers“

高橋愛*，　豊田昌史**

Ai Takahashi*　Masashi Toyoda **

*玉川大学芸術学部芸術教育学科，　194-8610　東京都町田市玉川学園6-1-1

**玉川大学工学部マネジメントサイエンス学科，194-8610　東京都町田市玉川学園6-1-1

*Department of Arts Education, College of Arts, Tamagawa University,

6-1-1 Tamagawagakuen Machida-shi Tokyo 194-8610

** Department of Management Science, College of Engineering, Tamagawa University,

6-1-1 Tamagawagakuen Machida-shi Tokyo 194-8610

Abstract

The class “teaching practice” is a good opportunity to develop classroom teaching competency. On the other hand, there are few opportunities to develop other teacher’s competencies. We make a group research of the class “advanced seminars for prospective teachers“ students develop teacher’s competencies. We report results of the group research of the class “advanced seminars for prospective teachers“.

Keywords: Teaching practice, teacher’s competency, advanced seminars for prospective teachers

1. はじめに

２０１５年度教職実践演習にて、玉川大学工学部と芸術学部は合同でグループ研究を実施した。本稿は、この取り組みの実践報告である。

教職実践演習とは、教職に関する必修科目である。「教職課程の他の授業科目の履修や教職課程外での様々な活動を通じて、学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて最終的に確認する」[1)]ことを趣旨としている。「最終的に確認する」科目であるため、履修は４年生秋セメスターである。

玉川大学における教職実践演習では、以下の３つを行う。

- 培ってきた能力の確認（自己分析）および不足部分（知識や技能など）の補完をする。
- 自分自身の課題やこれからの教員のあり方について考察し、今後に活かせるようにする。
- 本学の求める教師像（学習指導力、幼児・児童・生徒指導力、学級経営力、協働力などの教員としての資質・能力）を確認し、自己の目指す教師像を明確にする。

本学の求める教師像とは、玉川教師訓「子供に慕われ、親に敬われ、同僚に愛せられ、校長に信ぜられよ」に基づき、以下の力量を備えた教員をいう。

①確かな学力と健やかな体を育てる「学習指導力」
②豊かな心を育て自己実現を図る「幼児・児童・生徒指導力」
③ともに高め合うクラスをつくる「学級経営力」
④新たな学校づくりを推進する「協働力」

玉川大学において、教職実践演習は各学部が免許取得教科別に実施する。工学部（数学・情報免許）における取り組みについては、２０１３年度の報告を下田・豊田(2013)[2]で、２０１４年度の報告を髙橋・豊田(2014)[3]で行っている。本稿では、２０１５年度以前には行わなかった芸術学部との合同グループ研究についての実践を報告する。

2. グループ研究の目的

大学では、既存の方法を学ぶだけでなく、自ら新しい方法を見出せるよう学びたい。実際、橋本は「勉強」と「学問」の違いについて、「『勉強』とは、『ある問いに対する答えを学ぶこと』である。これに対して『学問』は、『答えの確定していない新たな問いを発すること』である」[4]としている。大学が「学問」の場であるとするならば、教職課程においても、教える方法を習得するだけではなく、方法を見出せるようになりたい。

教職実践演習の授業で、教育実習報告書をレポートとした。教育実習報告書には、以下の３つについて記述する。(1)実習先および実習期間、(2)失敗談、うまく出来なかったこと、(3)工夫したこと、である。(2)において、授業での失敗をあげた学生が２２人中１９人であった。例えば、次のような記述があった。

- 授業については、うまくいかないことばかりであった。授業の流れをイメージして、板書計画を作成しても、実際の授業では思い通りにいかないことばかりであった。発問に対して適した答えが返ってこない。説明の意味を理解できていない様子の生徒が見える。（Ａさん）
- 授業を行う際文字があまり上手く書くことが出来なくて斜めになってしまった為、今後上手くかけるよう練習していきたいと思う。（Ｂさん）
- 教育実習期間全体を通じて特にうまくできなかったことは、抑揚をつけた言動である。例えば、授業時に抑揚なく淡々とした話し方で続けてしまったせいで、聞いている生徒が眠くなってしまう、本時の大事なポイントが印象に残らない等、良くない影響がたくさん出てしまった。（Ｃさん）

このような失敗経験は、自分なりの方法を見出すきっかけとなる。実際、教職実践演習の授業において、経験を振り返る機会をもち、どのような改善策が講じられるかを考えてもらった。Ａさんは、「的確な発問ができる」ようになることを自分の課題とした。そして、的確な発問ができたかどうかの確認指標のひとつを、「生徒から正しい解答が返答される」とした。Ｂさんは、「板書、話し方、表情など授業を行う上での基本的な表現力を身に付けている」必要があるのが自分の課題であるとした。また、それが出来ているかの確認指標として、「授業終了時、板書ノートと黒板とのギャップがゼロになっているかどうか」をあげている。Ｃさんは、「一人も寝ている生徒がいない」か「退屈そうにしている生徒がいない」かを適宜確認することで、自身の課題である「抑揚をつけた言動」ができているかどうかを確認できるとした。

以上のように、失敗経験を振り返る作業によって、自分なりの方法を見出す機会とできる。ほとんどの学生は教育実習において、学習指導に関する失敗経験を持ち、その後の振り返りによって、自分なりの方法を見出せている。すなわち、学習指導力をつける機会を持てている。

一方、生徒指導、学級経営、協働といった領域は、教育実習において失敗経験を積む機会は少ない。しかし、それらの重要性について、教育実習

で気づくことは出来る。例えば、学生のレポートに、次のようなコメントがある。

- 生徒との距離を縮める大きなきっかけとなったのが体育祭だ。（Dさん）
- 生徒と多く交流することを心がけた。最初は運動会練習が多くあったため、その中で学年関係なく積極的に話しかけることから始めた。（Eさん）
- 実習を通してうまくできなかったことは、朝や帰りのホームルームです。授業をするために生徒の前に立つのとはまた違う緊張がありました。（Fさん）
- 「学級経営力」が課題である。まだ教員としての経験が足りない為、今後良く考える必要があるが、暖かく支え合える学級、積極的な姿勢を持つ学級、規律があり雰囲気がよい学級など、予め自分が求める理想の学級像を考えることが重要である。（Gさん）

教職実践演習のグループ研究は、学習指導以外の生徒指導、学級経営、協働でも、自分なりの方法を見出す場でありたい。

以上のことから、グループ研究を行う目的は以下の二つとした。

一つは、学習指導力以外の力の確認および補完である。学習指導力以外の力とは、生徒指導力、学級経営力、協働力である。学習指導力に関しては、教育実習およびその後の振り返りによって、自分なりの方法を見出すことができる。しかし、多くの学生にとって授業以外の活動を深める機会はなかなかない。例えば、保護者との対応も教員の重要な仕事であるが、そういった場面に教育実習生が関わることはほとんどないであろう。席替えや朝の会といった学級経営の部分も、教育実習で垣間見ることはできても、そう深められるものではない。そこで、グループ研究では、教育実習中には深めにくかった学習指導力以外の力の確認および補完を目的とした。教育実習を終えた学生は、フィールドワークできる場を持つ。教育実習や教育ボランティアで関わった学校である。学習指導力以外の部分の補完という教育実習とは違った視点で再度、現場の学校に足を運び、更なる勉強の機会としたい。

もう一つは、協働の実践である。協働力は、1回や2回の授業で扱うよりも、より時間をかけて確認されるべきものであろう。発表会に向けて、テーマを設定し、調査し、まとめあげていくグループ研究は、協働力を確認するのによい活動である。さらに、工学部の学生ばかりでなく、芸術学部の学生も含めてグループを構成した。芸術学部は、パフォーミング・アーツ学科（音楽免許）、ビジュアル・アーツ学科（美術・工芸免許）、メディア・アーツ学科（美術免許）から構成されている。工学部も芸術学部も、教職実践演習を金曜日の同時刻に開講しており、一緒に活動がしやすい。そこで、工学部および芸術学部の学生を混在させてグループを構成し、グループ研究の活動を進めた。ひとつの形にまとめあげる作業を要するグループ研究は、実践を通して協働力を学ぶよい機会となろう。

3. グループ研究の概要

テーマは以下の通りである（表1）。[5)]

表1．グループ研究テーマ一覧

	テーマ	資質・能力
1班	運動会	生徒指導力
2班	保護者	協働力
3班	理想の教師像	―――
4班	道徳の時間	生徒指導力
5班	不登校	生徒指導力
6班	学級通信	学級経営力
7班	朝の会	学級経営力
8班	地域	協働力
9班	席替え	学級経営力
10班	チャイム制とノーチャイム制	生徒指導力

各グループのより詳しい内容は以下である。なお、学科の名称は、芸術学部のパフォーミング・アーツ学科をPA、ビジュアル・アーツ学科をVA、メディア・アーツ学科をMA、工学部のソフトウエアサインエス学科をSS、マネジメントサイエンス学科をMSと省略する。また、各学科の受講生は、PA２３名、VA７名、MA１名、SS１名、MS２１名である。

- １班（MS：３名、PA：２名、MA：１名）

  テーマは「学校行事においての生徒指導・対応力」である。学校行事は、教科や学年の枠を超えて教員全体で携わる。このような協働して生徒指導を行う必要がある学校行事について調査した。特に調査対象として、比較的早い時期に行われ、クラスの団結の機会ともなっている体育祭（運動会）に焦点を当てた。

  調査は、６校を対象とした。学校や行事の練習に休みがちな生徒がいた場合でも、さまざまな対応方法があると分かった。例えば、仲の良い友達やリーダー的存在の生徒に声をかけてもらい、生徒同士で解決してもらう。保護者と連絡を取り合うことで、行事への参加を後押しするやり方もある。また、体育祭の練習の際に生徒間でトラブルが起こりがちなので、常に気を配る必要があることもわかった。

- ２班（MS：３名、PA：２名、VA：１名）

  テーマは「保護者対応」である。学校で起こる課題によっては、保護者や地域と連携して対処することが必要な場合もある。このような教員以外の人で、協働する必要のある方々とどのように関わり、また対応しているのかについて調査した。特に、保護者に焦点を当てた。

  調査は、自由記述式の紙面によるアンケートを１０人の教員（小学校、中画工、高等学校）に行った。保護者対応において、普段から心がけていることから、学期始め、保護者会、電話対応、行事三者面談などの時に心がけていることを聞いた。発言の回数を均等にして、保護者すべての意見を保護者会では聞き取る、メールで済ませず電話で直接話すようにする、三者面談では保護者との二者面談にならないようにするなど、保護者と一緒に生徒を育てていく方法を学んだ。保護者に来てよかったと思えるように、写真をスライドで見せるなどの工夫ができることも知った。

- ３班（MS：２名、PA：３名、VA：１名）

  テーマは「理想の教師像」である。教育実習で垣間見ることが出来たように、教員の仕事は多忙である。教員としての理想像を持つことは、多忙な仕事を続けていくのに必要な資質の一つであろう。そこで、理想の教師像を明確にするために、現職の先生方のもつ理想の教師像を調査した。

  現職教員（神奈川県市立中学校３校、千葉県市立中学校１校、神奈川県私立高等学校１校）にインタビューを実施した。行動で示せる教員になるために、挨拶や返事を率先してしたり、年配の方を敬う気持ちを自ら表現する先生もいた。また、一人ぼっちを作らないようにするため声をかけたり、誰もが教員を頼れる存在となるためにきちん悪いことは悪いとはっきり言うよう心がける教員もいた。

- ４班（MS：２名、PA：３名）

  テーマは「道徳の時間」である。いじめや子供の自殺が社会問題となり、道徳の時間の大切さはますます強まるであろう。そこで、これからの道徳の時間の在り方を探るために、現在、どのような取り組みがなされているかを調査した。特に、いじめを題材とした道徳の時間について調べた。

  調査は、１校（神奈川県町立中学校）訪問

し、現職の先生にインタビューを行った。実際の事件を扱う方が効果的なため、新聞記事を教材にすることもある。特別支援学級では、分かりやすさを重視し、紙芝居を教材にすることもある、生徒が傷つかない発問や教材を考える必要がある、違う考え方があることを理解するためにあえてまとめることはしないといった注意点も聞けた。生徒との日常のコミュニケーションや観察がまずは道徳教育の基本となると学べた。

- ５班（MS：２名、PA：２名、VA：１名）

テーマは「不登校」である。不登校と言っても、一時的に学校に行かないだけで済む場合もある。長期にわたる不登校とならないためにも、初期の対応が重要となろう。そこで、初期の対応として教員にどのようなことが出来るかを探るため、不登校について調査した。

まずは、不登校の定義「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しない、あるいはしたくともできない状況にあるため、年間３０日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由による者を除いたもの」を示したうえで、不登校の全国データや国の対策を調べた。さらに、学校（神奈川県私立中学・高等学校１校、神奈川県県立高等学校１校、東京都区立中学校１校、東京都都立高等学校１校）への調査を行った。学校に来ないといけないというプレッシャーを与えないとか、たとえ登校できたからといって特別扱いをしないなどの対応方法も知ることができた。最後には、適応指導教室にフィールドワークを行い、小学５年生から中学３年生までの６人に模擬授業を行った。

- ６班（MS：２名、PA：２名、VA：１名）

テーマは「学級通信」である。学級通信は、生徒とのコミュニケーションを深めたり、クラスの様子を把握する道具となる。そこで、学級通信がどう活用されているのかを調査し、より良い学級通信の在り方を検討した。

６名の現職教員（小学校１校、中学校４校、高等学校１校）にインタビュー調査をした。学級通信を出す目的は、保護者に児童生徒の様子を伝えるのが全員の先生に共通したものであった。また、行事はもちろん、日常生活の出来事も取り上げて、生徒の振り返りの機会として活用している。

- ７班（SS：１名、MS：１名、PA：２名、VA：１名）

テーマは「朝の会（朝のショートホームルーム）」である。学級経営の手段として、朝の会がある。朝の会をうまく活用すれば、より良いクラスの状態を作ることができるであろう。そこで、現職の先生がどのような意図のもと朝の会を行っているのかを調査し、より良い朝の会の在り方を検討する。

調査は、現職の先生（千葉県私立高等学校１校、長野県市立中学校１校）にアンケートとインタビューをした。朝の会を生徒主体で行う場合と先生主体で行う場合についてのメリット・デメリットを考察した。朝の会を生徒主体で行うメリットは、生徒の自主性やリーダーシップを育むことができる。ただし、先生主体で行うよりも時間がかかったり、伝達内容に漏れがあったりして効率が悪い。先生主体で行うと、学級活動としての重要性が薄れるものの、短時間に効率よく進めることができる。挨拶には上下関係がないことを示すために、生徒に挨拶する際には「おはよう」ではなく「おはようございます」と言うようにしているといった心掛けも聞けた。

- ８班（MS：２名、PA：３名）

テーマは「地域と学校の関わり」である。学校で起こる課題によっては、保護者や地域と連携して対処することが必要な場合もある。このような教員以外の人で、協働する必

要のある方々とどのように関わり、また対応しているのかについて調査した。特に、地域と良好な関係を築くために、どのようなことがなされているかに焦点をあてた。

調査は、５校（神奈川県市立小学校１校、神奈川県市立中学校１校、東京都市立中学校１校、千葉県私立高等学校１校、秋田県市立中学校１校）にアンケートを行った。地域のお祭りに参加したり、海と川でのゴミ拾い、一人暮らしの家の雪寄せのお手伝いなど、学校の生徒が地域に出ていく場合や、体育館の夜間一般開放や体育祭にＰＴＡ種目があったり、文化祭に地域の合唱サークルが参加するなど、地域の方々が学校に来る場合もある。公立学校においては、地域の特色を出しながら様々な形で地域と関わっていることを確認できた。それに比べて、私立学校は地域との関わりが少ないことも確認された。地域の人と顔見知りになるのも大切だが、生徒の個人情報を安易に漏らさないよう気を付ける必要があるといった交流が活発な場所ならではの注意点も聞くことができた。

- ９班（MS：２名、PA：２名、VA：１名）

テーマは「席替え」である。教室の掲示物や席の配置など、教室の環境を整えるのも学級経営の重要な手段であろう。そこで、どのような意図のもと席替えが行われているかを調査した。指導方針に適した席替えは何か、また、注意点はどこかを検討した。

調査は、学校（小学校、中学校、高等学校）にアンケートを行った。どの校種でも、席は学級経営に有効な手段として捉えている。例えば、ある小学校で行われている希望制の席替えでは、児童に自分で席を決めさせることで、責任感を育もうとしている。また、ある小学校はくじで席替えを実施しているが、偶然近くなった人とでも新たな人間関係を築けるようにとの意図で行われている。一方、ある高等学校ではやはりくじで席替えを実施しているが、それは公平性を示すために行われている。ある小学校では、席替え時に今までの隣の席の人に「ありがとうカード」を書くといった工夫も聞くことができた。

- １０班（MS：２名、PA：２名、VA：１名）

テーマは「チャイム制・ノーチャイム制それぞれにおける生徒指導」である。チャイム制を採用する学校では、生徒指導としてチャイム着席の奨励がある。一方、近年、チャイムを活用しないノーチャイム制を導入する学校も出てきたが、そのような場合、どのような生徒指導がなされ得るか。そこで、チャイム制・ノーチャイム制それぞれの学校における生徒指導について調査した。

調査は、アンケートとインタビューを行った。チャイム有りの学校（埼玉県市立中学校１校）とチャイム無しの学校（神奈川県市立中学校、埼玉県市立中学校１校）である。チャイムのメリットは、切り替えがしやすいことである。デメリットは、チャイムを頼りに動くので、時計を見て動くようになりにくい。一方、チャイム無しのメリットは、時間を意識して生徒同士で対応するため、自主性が育まれ、リーダー育成に有効である。ただし、教師も時計を見て行動しないといけないため大変になる。また、学校が荒れている場合はノーチャイム制の定着は困難であり、どこの学校でも実施できるわけではない。チャイム制の学校に「チャイム着席」があるように、あるノーチャイム制の学校では「タイム着席」という指導法を実施していると学べた。授業開始前５分に教室に入り、２分前に着席するというものである。点検も班長や学級委員が行い、遅れる生徒への対応は委員会で話し合うなど、生徒同士でルールを決める。ノーチャイムを活用した生徒指導の手法を学べた。

4. グループ研究の成果

グループ研究の目的は、一つは学習指導力以外の確認および補完、二つめは協働の実践であった。本節では、これらの目的に対しての成果を考察する。

一つめの目的について検討する。まず、研究テーマのバランスの良さである。実際、生徒指導力についてが４班、学級経営力についてが３班、協働力についてが２班である。これらの力を総括する形で理想の教師像をテーマにした班が１班あった。生徒指導力や学級経営力、協働力といった学習指導力以外の力の確認および補完が目的であったことから、テーマがバランスよく設定されたのは成果のひとつとなろう。

ただし、学習指導力以外の力の補完という意味では不十分な面もあった。実際、グループ研究の活動として、今後の取り組みにまで考察を十分に深められなかったとの回答が学生より多く得られた。それらは、学生に記述してもらった評価用紙からわかる（図１、２）。

2015 教職実践演習　2016.01.15

グループ調査研究発表　評価用紙

氏名：

各グループの発表を聞いて、評価し、気がついたことがあればメモをしましょう。
質疑応答時に、気がついたこと、考えたことなどは、別枠に記入しましょう。
また、発表グループは、「自省欄」を記入しましょう。

グループ１

項目	評価
調査の目標・目的がはっきりし、わかりやすいか	1　2　3　4　5
提示資料や配布資料など相手につたわるよう工夫しているか	1　2　3　4　5
課題を明確にし、今後のとりくみについてふれられているか	1　2　3　4　5
メモ：	
質疑応答：	

グループ３

項目	評価
調査の目標・目的がはっきりし、わかりやすいか	1　2　3　4　5
提示資料や配布資料など相手につたわるよう工夫しているか	1　2　3　4　5
課題を明確にし、今後のとりくみについてふれられているか	1　2　3　4　5
メモ：	
質疑応答：	

図１．グループ研究発表の評価票１

2015 教職実践演習　2016.01.15

グループ９

項目	評価
調査の目標・目的がはっきりし、わかりやすいか	1　2　3　4　5
提示資料や配布資料など相手につたわるよう工夫しているか	1　2　3　4　5
課題を明確にし、今後のとりくみについてふれられているか	1　2　3　4　5
メモ：	
質疑応答：	

自省欄

項目	評価
調査の目標・目的を明確にすることができた	1　2　3　4　5
その評価をした理由について	
提示資料や配布資料など相手につたわるよう工夫した	1　2　3　4　5
その評価をした理由について	
課題を明確にし、今後のとりくみについて考察し発表できた	1　2　3　4　5
その評価をした理由について	
質疑内容について	

図２．グループ研究発表の評価票２

特に、図２の下枠の自省欄とは発表者が記述する。自省欄の項目１では「調査の目標・目的を明確にすることができた」、項目２では「掲示資料や配布資料など相手につたわるよう工夫した」、項目３では「課題を明確にし、今後のとりくみについて考察し発表できた」である。それぞれの回答は、以下のようであった（図３、４、５）。

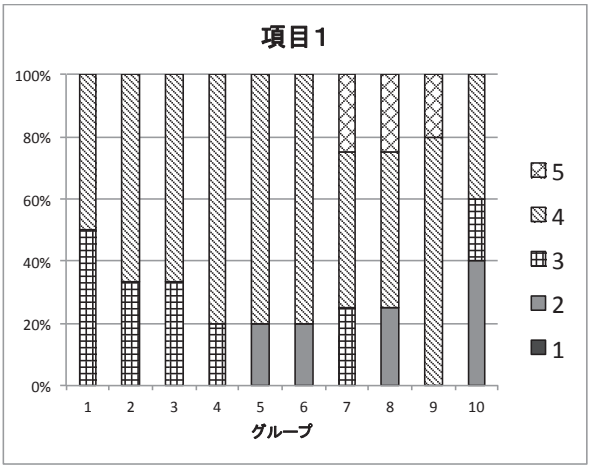

図３．項目１「調査の目標・目的を明確にすることができた」

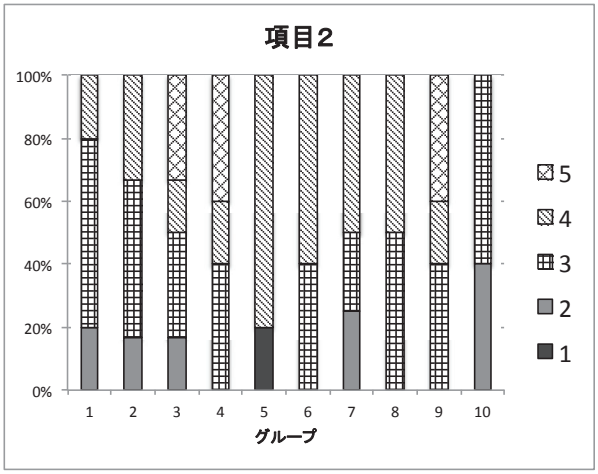

図４．項目２「提示資料や配布資料など相手につたわるよう工夫した」

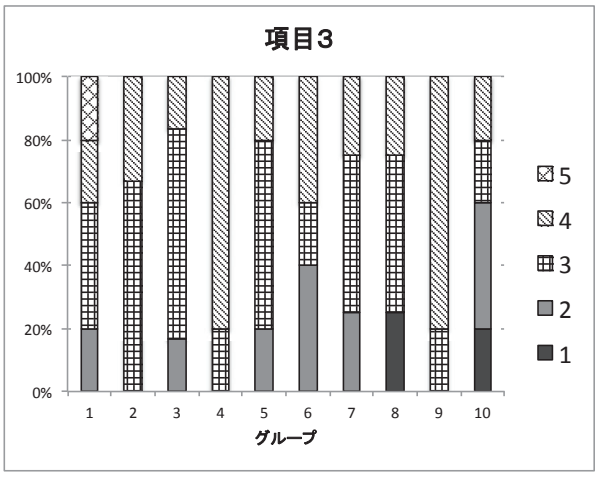

図５．項目３「課題を明確にし、今後のとりくみについて考察し発表できた」

回答結果によれば、各グループとも、おおむね「調査の目標・目的を明確にすることができた」としているが、「課題を明確にし、今後のとりくみについて考察し発表できた」という面では弱かったと自己分析している。これは、時間的な制約も大きかったであろう。４年次の後半で、卒業論文という大きな課題と重なりきつい日程となったようである。グループ研究は、各グループ、授業時間外の自主性に任せたが、それが負担をさらに強くしたようである。ただ、課題を解き切れなかったのだとしても、「答えの確定していない新たな問いを発すること」には、項目１の回答から有効に働いたといえるであろう。実際、次のような記述が、振り返りシートから見られた。

- フィールドリサーチを通して、学校や年齢、現場経験の異なる先生方から理想の教師像についてお話を伺ったことで、理想の教師像をもつために参考となる意見を多くいただいた。その結果、今まで曖昧だった理想の教師像を明確にすることができた。これを目指していきながら、学校や生徒の実態、現場経験によってより具体的な教師像を見出していきたい。（Hさん）

次に、二つめの目的について検討する。振り返りシートによって、学生から次のような意見が得られた。振り返りシートとは、授業終了後に提出したレポートである。

- 自分だけでどうにかしようという意識を改める事ができた。普段の授業や教育実習を通して何度かのグループワークを行って来たがはじめの頃に比べて協力し合うことに慣れてきたと感じる。また、人に指示を与えたり、受けた指示をこなす力が成長したように感じることができた、協働の大切さを知る事ができ、大変ためになった。（Ｉさん）
- 人と協力して何かを作っていく際の基本的なマナーや、相手への配慮、言葉選びの重要性を感じ、人と一緒にまとめていくことの難しさを知った。（Ｊさん）
- 報、連、相の大切さを身に染みた。（Kさん）
- 以前は積極的に手伝いやサポートをすることが苦手だったが、今回のフィールドワークではわからないことがある人に対して積極的に働きかけることができた。（Ｌさん）
- 工学部と音楽というタイプの違う方々と関わり、普段とは違った考えに触れることができたため、柔軟に考える力や協力しながらうまく関わっていく力が身に付いた。（Mさん）
- 今まで自分の考えがよくまとまっていない

のに発言しようとしていたから、言葉がつまっていた。この実践演習では主にグループワークを取り組んでいく上で、話し合いが必要不可欠なため、しっかり自分の意見が言えるように前もって準備して考えていることを整理して発言していく意識を持てた。（Nさん）

- 教職実践演習で得られたもので一番大きいと考えられるのは、人と協力して授業を計画する、発表を考えるなどの経験であった。今までもグループで何かを行うことは何度かあったが今回のことが大きな経験と思えるのは、いろいろなことを勉強し自分の理解も深まった上で、教育実習を行った上で取り組んだ活動だったからだと思う。意見の食い違いや認識の違いは実際先生同士でも当たり前にあることであるだろうし、その時にそれぞれの教科を踏まえながら上手く協力していく力が必要となる。この授業では人と協力することの難しさも改めて感じることになったが、協力することの大切さや学校という現場での必要性も強く感じた。とくに教科の違いによる考え方の違いは興味深く、今後もより広い考え方で物事を見ていきたいと思えた。よい指導をするために人と協力して作っていくことの大切さを実感することができた。（Oさん）
- 特に、協働力については、なぜ連携が必要なのかという前提から深く追求する良い機会となった。グループ研究では学級通信の必要性についてフィールドワークや文献分析を行い学級経営について考察した。一貫して、学生同士のコミュニケーションが必須であったため、協働力を高めることができた。何故協働が必要であるかを学び、それを実践することができた。（Pさん）
- グループ活動に関しては積極的に意見を言うことを常に心掛けた。意見がぶつかることも多く、難しいこともたくさんあったが、お互い意見を出し合い理解し合うことで最終的により良い形にまとめることができたと感じる。基本的なことだが自分自身では大きな問題となるので、教員という仕事では積極的に人と関わり考えを共有することが重要であることも踏まえ、今後も意識していきたい。（Qさん）
- 以前は、周りに頼ったり意見をあわせたりしていたが、今回は積極的に取り組むことができた。工学部と音楽という分野の異なる方々と関わり、普段とは違った考えに触れることができたため、柔軟に考える力や協力しながらうまくやっていく力が身に付いた。また、グループの中での報告・連絡・相談を意識したため、共通理解をしながら全員で進めていくことができた。（Rさん）
- 自分自身の課題は、自分と違う学科や学部の人たちとグループワークをすることによって改善できた部分がある。自分は美術という分野だけに捕われて、考え方やモノの見方の視野が狭かったと感じられる。しかし、グループワークでは今まであまり関わったことのない分野の人と交流することで、それぞれの違う意見や発想が新鮮であった。このことから積極的に自分の考えを発言することが自然とできたと感じられた。また、これからも様々な分野の人との交流を進んでやっていき視野を幅広くして自分を高めていきたい。（Sさん）

以上の意見には、他者と合わせることは「難しい」、「意見がぶつかる」、「言葉」の配慮、などといった言葉がよく見受けられる。学生たちにとって、協働の大変さを実感するグループ研究となったようである。特に、芸術学部の学生にとってその傾向がより強かったようである。芸術学部は、工学部に比べて、自己表現を重視する活動を

日頃行っている。他者と意見や調子を合わせ過ぎれば、自己表現ができない。独自性が重視される分野であるからこそ、協働を妨げる特質が現れがちである。例えば、積極的には動かない、意見を言わず合わせる。あるいは逆に、主張が強すぎて先走りしてしまう。実際、学生の意見にも「以前は、周りに頼ったり意見をあわせたりしていた」「今まで自分の考えがよくまとまっていないのに発言しようとしていた」といった意見が出ている。グループ研究では「意見がぶつかることも多く、難しいこともたくさんあったが、お互い意見を出し合い理解し合うことで最終的により良い形にまとめる」ことで、身を持って協働を経験したと言えるであろう。

5. おわりに

「2. グループ研究の目的」で述べたように、グループ研究の目的は、一つは学習指導力以外の確認および補完、二つめは協働の実践であった。特に、二つめの協働の実践の部分で学生、教員双方にとって印象に残る授業となった。当初、グループ研究がうまく機能しないグループもあった。相談に来る学生もおり、その苦労の一端は「4. グループ研究の成果」に記したとおりである。苦労を乗り越え、「自分だけでどうにかしようという意識を改める事ができた」（Ｉさん）、「報、連、相の大切さを身に染みた」（Ｋさん）、「タイプの違う方々と関わり、普段とは違った考えに触れることができた」（Ｍさん）等の学びの成果を得られた。

学生に限らず、今回の工学部および芸術学部の合同グループ研究は、教員にとっても協働の実践の場であった。教員の連携が不十分な場合、学生に迷惑をかけてしまう。実際、レポートの体裁について工学部と芸術学部の担当によって伝達の相違があり、学生を混乱させたようである。また、グループ研究がうまく機能しないグループは、工学部の学生は工学部担当教員に、芸術学部の学生は芸術学部担当教員に相談に行く。お互いに集まった相談の情報をどう共有し、問題点をどう解決していくかの検討は、同じキャンパスとはいえ、学部を超えた教員同士、時間をねん出するのが大変であった。「報、連、相の大切さ」や大変さを実感したのは、学生だけでなく担当した教員も同様であった。

工学部と芸術学部という分野の違う教員の協働により、互いを補える部分もあった。例えば、図１、２にあげた評価用紙は、著者の一人（髙橋）が他の授業で発展させてきたものである。生徒の個性なのかそれとも正すべき間違いなのか判断の難しい芸術分野の教員を目指す学生であるからこそ、評価を強く意識したい。そこで、著者の一人（髙橋）は、評価用紙を教職科目において導入してきた。評価用紙活用の詳しくは、髙橋(2013)[6]を参照されたい。一方、数学は正解かそうでないかが分かりやすい。そのため数字や証明が合っている以上の評価の意識がかえって薄くなる。問題の解き方を教えた先の学びをどう授業で組み立てられるか。工学部で教員を目指す学生にとっての課題が、評価用紙をめぐる教員同士の協働で浮かび上がった。評価用紙という一つのツールが、免許種ごとに抱える課題の違いにまで発展できるのは面白い。「自分だけでどうにかしようという意識を改める事ができた」、「タイプの違う方々と関わり、普段とは違った考えに触れることができた」のは、学生に限らず担当する教員も同様であった。

教員は多くの人との対話が必要であろう。生徒に限らず、同僚、管理職、職員など学校に直接関わる人から、保護者、地域や近隣施設など学校を取り巻く環境における人とのコミュニケーションをとり、協働して、生徒の育成に関わる。そのため、協働の実践は特に重要になる。工学部と芸術学合同のグループ研究は、学生および教員双方にとっての協働の実践の場となった。

謝辞

多くの学生の意見を引用させていただきました。ここに感謝いたします。

参考文献

1) 中央教育審議会「今後の教員養成免許制度の在り方について（答申）」平成 18 年 7 月 11 日.

2) 下田照雄・豊田昌史，学生同士による「教育実習(事後指導)」を目指した工学部における「教職実践演習」玉川大学教師教育リサーチセンター年報，第 4 号（2013 年度), 131−140.

3) 髙橋愛，豊田昌史，教職実践演習における芸術学部と工学部の合同模擬授業の取り組み，玉川大学教育リサーチセンター年報，第 5 号（2014 年度), 77−89.

4) 橋本努，学問の技法，筑摩書房，17 頁，2013 年.

5) 髙須一，髙橋愛，豊田昌史編集，平成 27 年度「教職実践演習」課題集，玉川大学芸術学部・工学部, 2016 年

6) 髙橋愛，中学校・高等学校美術科教員養成における「美術科指導法」の内容 ―4 年間の活動報告から― 玉川大学教師教育リサーチセンター年報，第 4 号（2013 年度), 141−145.

2016 年 3 月 18 日原稿受付，2016 年 3 月 30 日採録決定
Received, March 18, 2016; accepted, March 30, 2016